國學院大學学術情報リポジトリ

コメント　中世における神宮御師形成の視点から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 郁 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001514

《コメント》「中世における神宮御師形成の視点から」

皇學館大学研究開発推進センター　助教　小林　郁

【加瀬】これから先の司会を務めます國學院大學の加瀬と申します。よろしくお願いいたします。

お二方の今までの発表の中では、焦点がある程度絞れているところもありますが、ここでは話の幅を広げるという意味で、別の角度からコメントを頂戴する形を取りたいと思います。

皇學館大学研究開発推進センターの小林郁さんにコメントを頂戴したいと思います。早速ですが、よろしくお願いします。

【小林】皇學館大学研究開発推進センターの小林でございます。本日は、このような機会をいただきありがとうございます。私は普段、中近世の伊勢神宮や神宮御師を主に研究しておりまして、今回の古代・中世の移行期を焦点とした議論は、私的にちょっと冒険するようなテーマとなります。本日はコメントとしまして、「中世における神宮御師形成の視点から」ということで、早速始めていきたいと思います。

まず、なぜ神宮御師の視点からコメントをするのか、という点についてお話しさせていただきたいと思います。そもそも「御師」というのは、特定の社寺に所属し、師檀関係にある信仰者の願意を神前に取り次ぎ、彼らの祈祷や参詣時の世話（宿泊・案内など）をした人たちのことです。全国的に見られ始めたのは平安中期頃からで、日吉社や賀茂社といった古社寺を中心に出現しました。伊勢神宮の場合、「神宮御師」や「伊勢御師」という呼び名で知られているのですが、彼らの出現は他の古社寺より若干遅く、鎌倉期の「口入神主」という存在にその前身の一部を見出す

ことができます。このあたりの事については後ほど詳しくお話ししますが、その後彼らは十五世紀頃の参宮者急増に伴う形で、室町・戦後期にかけて飛躍的な発展を遂げ、多くの方がよくイメージする近世の神宮御師像へと繋がっていくのです。

ところが、神宮御師の発生を裏付ける鎌倉期頃の関連史料については、実はあまり残っておりません。あるとすれば、『吾妻鑑』に登場する口入神主の活動くらいでしょうか。なので、今回のテーマである古代中世移行期の射程範囲となる神宮御師の発生史的部分については、詳細がよく分かっていないのです。実際、神宮御師が史料上に現れるのは室町期に至ってからで、それ以前は「御師」という名称自体確認できないとされています。ですが、「史料がないから考えることができない」と結論付けてしまうのは、私は違うのではないかと思います。むしろ、史料的な制約がある時代だからこそ、どのように神宮御師が形成されていったのかということを考えるべきで、このあたりを考証することによって、古代・中世移行期の神宮を考える上で重要なポイントが見えてくると思っております。

さて、神宮御師と一口に言いましても、実は二系統存在します。まず一つは、古くから内宮・外宮において代々神職を務めてきた、荒木田氏・度会氏のいずれかを出自とする神主層の人々です。私はこれを「神主家御師」と呼んでいるのですが、彼らのほとんどが、正禰宜・権禰宜の区別なく本職である神主を務める傍ら、御師業を営んでいたことが分かっております。そしてもう一つが、神主家を出自としない地下人層の御師で、私はこれを「異姓家御師」と呼んでいます。彼らの出自にはっきりとした統一性はないのですが、おおよそ、職掌人や商人、高利貸しといった商売をしていた家が多い傾向にあります。このように、神主家御師と異姓家御師は出自が大きく異なるのですが、それぞれがどのように発生・成長していったかを突き詰めていくことで、古代・中世を経て、その先の近世へと繋がる神宮御師の姿を描き出すことができると考えております。

実は昨年、神宮御師の形成期について、『〝出入り〟の地域史―求心・醸成・発信からみる三重―』（雄山閣）という本に書かせていただきました。先ほども申しました通り、神宮御師の形成期にあたる平安・鎌倉期頃については関連史料が乏しいのですが、無いところをひたすら探していても仕方がありませんので、とりあえず関連史料が一定数確認できる古めの時代をやってみようということで、私は十五世紀中頃から十七世紀前半までの「道者売券」という古文書に再注目してみました。「道者売券」とは、神宮御師たちが自分と師檀関係にある道者（参宮者）へ御祓札を配ったり、参宮時の世話をすることを利権化し、それらを売買する際に発行された証文のことです。御存じの方も多くいらっしゃるかと思いますが、「道者売券」については、かつて萩原龍夫先生や西山克先生が御研究されていて、十五世紀以降に出された「道者売券」を時系列に並べ、その内容や発行数の変遷から、当時の神宮周辺区域の発展に関すること等を論じられています。

神宮御師たちにとって、道者の数が多ければ多いほど経済的に豊かになりますので、彼らは道者の権利を買い集めることによって経済的な基盤を作っていったわけですが、十七世紀前半までに出された「道者売券」は、意外にも多く残っていないのです。かつて西山先生は、萩原先生が検証された「道者売券」を再精査され、一五七通の「道者売券」を網羅的に研究されました。ところが、その後『伊勢市史　中世編』（伊勢市、平成二十三年）の中で、西山先生が検証された史料数の見直し・補填が千枝大志先生によって行われ、最終的に二六五通の「道者売券」の存在が明らかにされました。私はここに、近年新たに発見された永正六年（一五〇九）の一通を加えた、二六六通の「道者売券」を分析いたしまして、各文書の買主・売主の変遷から、神主家御師と異姓家御師それぞれの形成過程について考察しました。今日はこのお話を基盤としながら、中世の時代からちょっと遡って古代を見てみる、という形でお話したいと思っております。

まず、神主家御師の「道者売券」の初見は、宝徳元年（一四四九）に異姓家から買い取った事例です。そこから半世紀にわたる宝徳～明応期（一四四九～一五〇〇頃）というのが、神主層による道者の買取りが特に集中している期間となります。ここで注目すべきは、この期間に出されたすべての「道者売券」を見ると、神主層は一切異姓家側へ売却しておらず、彼らが売主側となっている文書の買主は、すべて同じ神主層の人間となっている点です。一方、買主側となっている文書では、神主層・異姓家層の両方が売主となっていますが、統計的に見て異姓家層から買い取っている事例の方が多いです。つまり、一四四九～一五〇〇年代にかけては、神主家御師による積極的な道者の買い占め行為がなされていた、ということになります。また、文亀～天文前期（一五〇一～一五四〇頃）の傾向を見ると、神主層による道者の売却自体が比較的少なく、特に永正十六（一五一九）から享禄三年（一五三〇）にかけては売主側に神主家の姿がぱったりと見られなくなります。すなわち、十五世紀中頃から十六世紀前半にかけての神主家御師は、物権化した道者権利の積極的な買収および異姓家への流出阻止を、約一〇〇年もの間継続してきたということです。

では、これらの動きが一体何に起因するのかと考えたところ、ちょうど「道者売券」が確認され始める十五世紀中頃の神宮といえば、寛正三年（一四六二）に内宮遷宮が行われたものの、以後百余年にわたって式年遷宮が中断してしまい、神宮は長期的な経済危機に陥っていきます。式年遷宮の中断時期は神主家による道者権利の回収期間とおおよそ合致するため、神主層が異姓家層の参宮人宿泊業に着目し、道者の集中的な買収や神主家同士の専売的な行動を見せたのは、当時の神宮を取り巻く社会情勢を背景とした一種の経済的政策であったのではないか、という結論に至りました。

一方、異姓家御師については、売主・買主ともに時期的な偏りが見られない傾向にあります。一見するとあまり面

白みのない結果に感じますが、一つ言うならば、「道者売券」内に見える異姓家の中でも近世まで存続している御師は、おおよそ買主側に集中しています。道者権利をより多く買い集めた者が近世まで生き残りやすい、というのは至極当然のことと言えますが、神主家と比較して全体的に「変化がない」という傾向をどう見るかというのが重要となってくるかと思います。「変化がない」ということは、その現象がある程度恒常化・安定化しているということですので、そこに普遍的な要素が垣間見えるわけです。このようなことから、十五～十六世紀を通じて恒常的な道者売買が行われていたということは、十五世紀の早い時期、あるいはそれ以前の段階から、道者を対象とした宿泊業の意識が異姓家層の中で確立していたのではないかと、私は考えております。いずれにしても、この二系統の御師が発展した背景には、鎌倉期以降徐々に見られ始めた参宮客の増加と、彼らに付随する諸権利の売買が強く関係していることは確実と言ってよいでしょう。そして、十五世紀以降の「道者売券」にその詳細な傾向が表れているということは、それ以前の時代を考える上で重要な情報となり得ると思います。

ではここで、神宮御師の発展を促した要因のひとつである伊勢信仰の広がりについて、それが一体何に起因するかを考えてみたいと思います。ここからは、本日の先生方のご発表内容と絡む部分が多くなってくると思いますが、私が注目したいのが、鎌倉中期に見られる御園・御厨の急増についてです。そもそも御園・御厨は、律令体制の崩壊に伴う神宮の組織的・経済的な変容を背景に発展していきました。組織的な側面で言えば、先ほどの比企先生のお話にもありましたとおり、宮司が行っていた神郡の経営に祭主が介入してきたり、両宮の禰宜たちによる禰宜庁が形成されていったり……こうしたところが、古代国家の管理体制時代から大きく変容した点に当たります。また、経済的側面については、全国的な役夫工米制度は残されたとはいえ、律令体制の崩壊による神宮経済基盤の揺らぎは相当なものであったようで、ある意味神宮は、経済の自給自足化を余儀なくされる状況に追い込まれたわけです。このような

経済的側面の大きな変化が、御園・御厨の形成に大きく関わってきます。

こうして改めて御園・御厨の出現について見ていきますと、古代から中世へと移行する過程で、それまで古代国家の一機関として位置付けられていた神宮が、次第に全国各地に所領を持つ巨大な権門勢家として存在を確立していく様子を見て取ることができます。ご存じの通り、御園・御厨は平安後期に出現し、鎌倉期以降に急増していきます。特に東日本に多い傾向にあるのですが、この背景には、冒頭で少しだけ触れました「口入神主」による神領寄進の斡旋活動が大きく影響しているのです。

「口入神主」とは、神宮と寄進者との間を仲介した下級神官たちのことを指します。彼らが神領寄進の斡旋に選んだ対象者は、総じて経済力のある武家や公家などの有力者層でした。有名なのが、『吾妻鑑』の中に登場する源頼朝と権禰宜度会光倫のやり取りで、口入神主である度会光倫が頼朝に対し、願書をもって神前へ取り次ぐ代わりに神領の寄進を願い上げている、というものです。お気付きの方もいらっしゃるかと思いますが、この「神領寄進と引換えに神前へ願意を伝える」という部分は、後世の神宮御師と檀家間のやり取りを彷彿とさせる行為であると言えるでしょう。また、頼朝のような有力者層側による神領寄進という行為については、そこには当然、寄進者自身の崇敬心が少なからず影響していたと見るべきで、口入神主たちの活動自体が伊勢信仰の拡大に直結していたと考えることができます。ちなみに、中世前期の時点で神宮側が神領寄進斡旋の対象とした有力者層との繋がりは、基本的に戦国末期まで変わらず継続されていくのですが、その間を取り持った存在が、戦国期当時に活躍していた神宮御師たちだったのです。このような点から、口入神主は後世の神宮御師たちの先駆的な存在なんだ、という定説が生まれてくるわけです。しかし私は、口入神主はあくまで神宮側から派遣された下級神主ですので、異姓家を含むすべての神宮御師の根本ではないと思っております。むしろ、「神前に取り次ぐ（祈祷する）」という口入神主側の行動から考えれば、神主

家御師の前身、あるいは神宮御師の持つ祈祷師的な側面の先駆的な存在として位置付けるのが自然ではないかと考えます。

また、御園・御厨の増加による神宮の権門勢家化は、異姓家御師たちの発展にも繋がっていきます。というのも、やはり神宮という巨大な権門勢家が確立しますと、そこには膨大な物資が流入することになり、さらに同時並行で伊勢参宮が盛んとなってきますので、人の出入りも活発となっていきます。そうなってくると、神宮の鳥居前町が自然と経済的な発展を見せるようになり、神主層・地下人層に関わらず神宮周辺に居住する人間や家屋が増え、次第に宇治・山田の町が都市化していきます。そして、そこへさらに大勢の参宮人が押し寄せ、両鳥居前町はさらに発展していく、といった流れが出来上がるわけです。

こうした後世に通じる社会的な現象の根本に関わってくるのが、塩川先生の御発表にもありました、十一世紀以降の全国の人々が意識した神宮の存在です。古代国家が崩壊して以降、これまで朝廷を中心に認識されてきた神宮が、中世へと至る間に、いわゆる国主神としての天照大神が全国の人々に意識されるようになった、という点が絡んでくるのではないかと思います。御園・御厨が領主層の信仰心を経て全国へと広がるうちに、次第に領民層にも神宮や天照大神への意識や信仰心が高まり、「いつか伊勢に行きたい」という気持ちが芽生えた結果、室町前期頃には特定地域の道者と宿泊契約を結ぶ異姓家御師の前身が登場し始め、そうした彼らの活動も相俟って、全国的な伊勢参宮へと発展していったのではないかと考えます。つまり、後世の異姓家御師に繋がる地下人層の人々は、年々増加する参宮客の受皿として神宮周辺に出現し始めた存在だったのであって、その過程で成立した「宿職」という参宮客への専売特許のようなものも含めて、彼らこそが異姓家御師の初源的な存在として位置付けられるのではないかと考えています。

まとめますと、今回の比企先生の御発表は、古文書学的な視点から宮司・祭主の関係性に注目されるという、神宮

組織の中枢に関わるようなお話でした。また、塩川先生の御発表は、十一世紀以降の社会状況を踏まえつつ、新しい神宮の存在意義を神宮周辺から見出す、という視点からのお話でした。神宮の内と外という対照的な視点からの先生方の御発表を拝聴しつつ、私の研究テーマである神宮御師の形成に当てはめて考えていたのですが、古代・中世移行期における神宮自体の意識転換のポイントは一体どこにあるのかというと、『儀式帳』にも記されている「私幣禁断」の意識がそのひとつとして挙げられるかと思います。「私幣禁断」とは、私的な願意のために私幣を奉ずることを禁ずるというもので、この意識自体は潜在的に神主層の中にあったのだと思います。ただ、あくまでこれは有力者層に限った話で、増加する一般の参宮客までもが、その取り締まりの対象となっていたわけではないと思います。

祭祀を含め、神宮は自らの中枢に関わるものは古式に則ることが基本であるため、恐らく古代国家が崩壊しても「私幣禁断」という意識は根本に残っていたことでしょう。ところが、神宮周辺の社会情勢は信仰心の高まりを含めどんどん変化しつつありますので、社会的な需要と自らの経済的危機等に順応していった結果、神宮が取った手段のひとつが、口入神主による神領寄進の斡旋活動であったと私は考えています。そして、十五～十六世紀には正遷宮が長らく頓挫をするという国家の一大事が起こりますので、そういった危機感がひとつのターニングポイント（私幣禁断に反する意識の黙認）となって、口入神主を含めた神主層が神宮御師として成長をしていったのです。そしてその様子は、当該期の「道者売券」の売主・買主の推移に如実に表れており、神主家御師より一足先に「宿職」が定着した異姓家御師たちの間では、恒常的な道者権利売買が既に行われていたことが史料上からうかがえるのです。

古代・中世移行期における神宮の組織的・経済的な変容は、私の研究フィールドである神宮御師の形成時期に深く関わるもので、彼らの出現が必然的であったことをうかがわせるような内容でした。特に、御園・御厨の出現については注目すべきポイントで、巨大な権門勢家である神宮の存在確立や、商業的・人的ネットワークによる信仰の拡大

といった社会現象の根底に位置するものと評価できます。やはりこの点が、私が思うところの古代・中世移行期の神宮を語る上で重要な要素であると思います。

ちょうどお時間も参りましたので、私のコメントは以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。

【加瀬】小林さんのコメントでした。まとめのところに、非常に簡潔に論点になるところをまとめられているかと思いますが、登壇者の先生の方で何か、これに関するリプライなどはあるでしょうか。

【塩川】小林先生のお話を私なりに咀嚼しますと、伊勢の御厨・御園の拡大という経済面の変化に応じて口入神主が出現し、それが後の御師の祈祷師的な側面につながる存在で、伊勢の神宮を取り巻く経済面での大きな変化がターニングポイントになった、ということかと存じますが、その点は私もそのとおりだと考えております。それが伊勢だけではなく、むしろ全国的に似たような現象が起きていて、その中で伊勢神宮がうまく適応した結果なのではないかと思いました。

何か目指すべきところがあって、そこに向けて組織化していったのではなく、むしろ状況が変化していったことに対して場当たり的に対応した結果が、中世の伊勢神宮だったのではないか、ということです。感想しか言えず失礼いたしました。

【加瀬】よろしいですか。

【小林】ありがとうございます。私も今日の塩川先生のお話を聞かせていただいて、神宮御師が出現・展開する土壌はこういった背景で生まれてきたのだな、というのを強く感じた次第です。神宮御師や伊勢参宮（信仰）の発展に重点を置くならば、先生のおっしゃる通り場当たり的な形成過程と評価することも可能かと思います。しかし、神宮の組織的な側面に重点を置いた場合、必ずしもそうとは言い切れない部分も出てくるのではないかと思っております。

その点は、比企先生の御発表内容にも関わってくる話で、今回の内容が祭主に関することなので神宮御師と直接的な関わりがないように思われますが、祭祀組織の変容という点で絡んでくると思います。

神主家御師は、正禰宜も権禰宜も、十五世紀中頃の「道者売券」に名前が見られます。ということは、祭主・宮司についてはわかりませんが、禰宜庁に属する上級神主たちも道者に注目していたわけです。時代がかなり後になってしまいますが、結果的に彼らが道者に注目をするきっかけとなったのは、やはり古代・中世移行期の中で行われた神宮の組織的な変容があってこそだと思いますし、そもそも口入神主という概念が生まれてくることも、その後の神主家御師たちの活動に繋がることもなかったと思います。そこに必然性と偶然性がどれほど見出せるのか、関連史料が無いというのは結構痛手ですので、古い時代の史料がもしもありましたら、教えていただけたらと思います。ありがとうございます。

――了――